LEON-TODO

N-ro 10

AUGUSTO-SEPTEMBRO 1954

ENHAVO

PRI : AMO AL PATRUJO ..... N. ASAHIGA 1

MOZART KAJ BEETHOVEN ..... H. BONTARO 9

UMOREBI (REMEMOROJ) ..... H. AIZAW 14

ESPERANTO KAJ KATAKANAO ..... ARIMA YOSIHARU 17

PRI LA ESTONTECO DE JAPANA FILOZOFIO (Traduko) ..... N. HAJAKAWA 23

PRI KORESPONDADO
aldono: Traduko d KAGUSA-HIME ..... T. TAKAHASI 25

MEMBRO-LISTO DE SAPPORO-ESP-SOCIETO .....

ANONCO DE LA 18-a HOKKAIDO-ESP-KONGRESO 32

―愛国心について―

朝比奈　昇

我々が戦時中その名の故に再び来ぬ青春を捧げ、各国の多くの人達がその名の故に命を投げ出した愛国心というものの本質は何であるか。敗戦以来ずーっと私が悩まされて来た問題はこれであったし、最近予備隊の発生と再軍備が企図されて必然的に愛国心の課題が提起され、青年達も思考を強要されているに違いないのもこの問題であろうと信ずる。私にとっては、更に国際語エスペラントの問題と結びついて半ば義務的な課題となり、現在迄長い間これを研究して来たので、今回その結果を公にして諸兄諸の参考に供したいと思う。

1.

「門出の前夜"私を未亡人にしてはいや。"というたきみの顔が目に浮んで離れない……。しかし今きびしい戦いに義務な国家への思いを盛った征衣へのおあつらえだ。生死の運命と共に、凡情とたたかい愛国の心にと満ちられた我が心はここまで高められて来たのだ。親々の心の苦しみとたたかい滿足感を感じたのだろうか。否、そう思いたくはない。一切の心の葛藤に打克ち素直に愛国の鉄だと考えたい。」（註1）戦争の正否を別として、すでに始まった以上は敗けられないというのが多くの人の偽わらぬ感情であった。が単なる愛国心なら誠も有するものであり、日本人には忠君愛国でなければならぬとされてき、一億玉砕、神川精神が強制された。時代の唯一の条件が国体の護持ではあったが、未曾有の敗戦により、天皇崇拝は崩れ、精神の緊張がゆるみ、国民道徳は地に陥ち、自己本位が国民的意識にとって代り、もはやどんな意味においても愛国心らしきものは見られなくなった。四六年一月野坂参三が延安から帰って匆々、その第一声でこの静かな混乱の日本に与えた大きな衝撃に他ならなかった。ファシストどもはこれまで共産主義者を非国民と呼び、売国奴と罵った。しかし共産主義者こそ、真にその民族を愛し、その国を愛するものである。」（註2）と。国民は初めて愛国心が多くの解釈と共に存在するという事実を知ってガク然とした。実は、従来の無意識的に固定されて来た愛国の観念に動揺が生じたのであった。

故に愛国に就ての論議は四六年から七年にかけてジャーナリズムをにぎわしたが各見解の単なる列に止って、問題は掘り下げられなかった。田中美知太郎・出隆は夫々「愛国心について」の中でソクラテスを論じて現実を、君子上の古例を引いて説明しようと試みた。南原繁も紀元節の演説で、無名の戦争にかり立てた愛国心とは異る「祖国愛」を提唱した。尊皇攘夷とか忠君愛国とかの非近代的愛国心はさておき、国際間の紛争を戦で解決する現在、愛国心なしには国家が戦争を遂行し得ないから、近代諸国家にとって共通な価値としての国家至上観がこの場合の問題であり、近代国家自体の封建性が日本の愛国心における封建性の基礎となっていることが重要である。

一旦下火になった論議は四九年九月再び安倍能成によって口火を切られた。彼は概念としてではなく現実の愛国の問題として愛国を取り上げた。松村一人は「愛国によって何が

実際に主張されているかを注目せねばならず、富裕階級と貧困階級と何れの利害が愛国の主張に関連しているかが大切である」と説き、磯田進は「愛国は階級の利益によって分裂している。そしてその一方の階級が人口の大多数を占めている」と主張した。後藤三郎もフランスから帰るや続々と著書を公にして祖国を愛する道を説いた。これ迄の例もすれば複念的な論説は高島善哉が「新しい愛国心」（註３）を著し、又清水幾太郎が「愛国心」（註４）を出すことによって一応の終止符を打たれた。前者は洗練された社会科学者の眼で愛国心を分析して「プロレタリア階級の愛国心こそは現代の愛国心である」という結論に達した。愛国心は常に厚史的、階級的なものであり、従って過去の戦争における愛国心の本質も亦厚史理論的に解析されるべきだとした上ところに科学性が発見される。これに反して他の一面、社会心理学的に愛国心を求めたものが後者であった。彼は愛国者としての最低の条件をも示した。１．同胞への素直な愛情　２．寛容の精神　３．戦争との絶縁　４．民族国家から世界国家への史的洞察　５．志士的悲壮感からの絶縁　が即ちそれである。彼は階級性を殆ど否定していること、平和と民主主義に結びつけていることが特に注目される。五十年八月に予備隊が生れるとジャーナリズムは再び愛国心を問題にした。そして、「君が代・日の丸・修身――国民実践要項」と連る天野方丈が現れ、「靖かなる愛国心」、戸田の「愛国の表情」、共産党の「民族戦線」等が市場に溢れた。柳田謙十郎、久野収、舞台田春夫、横田喜三郎、戸沢鉄彦、船山信一、東口元吉、田中忠五郎、向坂逸郎、高柔禄夫、千葉雄次郎、島芳夫、川島武宜、金森徳次郎、高橋庄太郎、小泉信三、飯島幡司、カミユ、山本新、大内一男、正木正、柳池謙一、正木ひろし、大熊信行等が講和を通っての諸事と共にこの時期に愛国心を取上げている。そして今、講和が既に結ばれて我々の進むレールが示されてしまった現在、現実の問題として愛国の問題が再び国民の上に現れて来ようとしている。

２．

愛国心とは何か。それを考える際に予め注意しなければならぬのは自明の事ながらそれが愛国主義とは明白に異るものだという点である。（高島も指摘している如く（註５）それは且つて屢々混同されたし、すりかえられて来たからである。）清水は彼の定義として「愛国心とは、自分の国家を愛し、その発展を願い、これに奉仕しようとする態度である」（註６）としているが、彼の言及（註７）をまつまでもなく、清水にあっては国家と民族と国土とを混然としているという点で、亦国家を静的なものとして（註８）観察している点で到底受入れ難いものである。出・古在（註４）は愛国心を次の様に述べている。（註10）「自分の属する国土、同胞、その文化に対いするきわめて深い愛情」これも或程度アイマイな点を含んでいる。それは清水に対しても云える事であるが、民族を単なる精神的結合体と考えるか、或は特定の物質的土台の上に成立した精神的結合体と考えるかという点である。前者では自民族の文化を守ること迄大切になるが、後者では文化的独立を可能ならしめる物質的土台、すなわち領土的経済的独立も亦問題となるからである。更に民族がこの様に経済生活の基に立って考えられる時自ら階級の問題が浮び上って来る。そして階級

的利益を離れた統合的な愛国心などは存在しないことが明かになる。「資本主義社会の発生と成立に伴い民族国家が形成せられ，ブルジョア民族主義があらわれた。かくて愛国心はこのブルジョアの支配する国家に対する奉仕ということに移しかえられた。ところが，この国家に奉仕し防衛し，強化するということは，ただ単に大衆が，愛する祖国に君臨するブルジョアジーという少数者の利益をはかることにすぎない。ブルジョアジーは自己の利益の為に自国の大衆を抑圧し隷属させるばかりでなく，進んで他民族をも侵略し奴隷化するにいたる。------ 侵略戦争によって祖国を危険に陥れ，自国大衆を奴隷化し，文化の発展を阻害し，更に他民族を隷属させるのとは反対に，国際間に友愛のきづなを結び自国内に実質的な自由と平等とを実現して，一切の抑圧を廃棄すること，この事業を実現することに，じつに愛国心の発揮もある」(註10)「従来生産力を担当して来た階級が もはや大衆的・歴史的基礎をもたなくなり，次第に支配階級としての不労的寄生的な階級になり，而も警察力と軍事力とのみによって己れの既得利益と伝統秩序とを護ろうとするようになるにつれて，真の愛国心は資本主義の擁護者の群を去ってその批判者，その反対者の場げなければならない旗幟になる。愛国心はここで再び大衆的な基盤を持ち，生産力の真の担当者のものになる。そしてこの場合にのみ，愛国心は，軍国主義のエキスパンションと結びつかずに，平和と反戦へのやみがたいヒューマニズム的心情と結びつくことが出来るのである。(註11)「問題の核心は愛国心をファシズムと全体主義への心的動力とするのでなく，デモクラシーの主体的な力にまで育成することに存している。新しい民主主義の主体力となるものは勤労者階級の階級的な自覚以外にはあり得ない。新らしい愛国心の育成には体制や民族の意識の外に階級意識の決定的な役割を無視することができないのである」(註12) もちろん我々は愛国心も社会問題の一つである故にそれを一定の厂史のワクの中で提起することを必要としていることを忘れてはならない。

ろ

愛国心のムジュンすなわち愛国心に伴う排外主義への堕落とコスモポリタニズムへの堕落の問題も亦我々にとって甚だ重要な問題である。愛国心が民族主義に連るのは前節で説明し得るとしても，愛国心とインターナショナリズムの繋りを如何に理解するかということは未だ充分でないように思はれる。清水はこの点に関して「世界の立場というのは個人の立場にほかならぬ。一切の集団から自己を解放し盡した人間の性質や願望によって直接に支へられるのが世界の立場である。個人と世界とは大小様々の集団を飛び越えて結合し，そして一つのものとなる。-----世界の発見を通じて愛国心は偏狭で排他的性質を棄て去るチャンスを与えられる」。(註13) といっているが，何ともよりない虹の様なものであろうか，「日本人の間には世界市民の立場が皆無であった。人間という存在の理解，人間の根本的同一性の承認こそ，人種や国境を越えた世界的結合をなすものであるが，かかる前提の欠如はコスモポリタニズムを不可能にする。」(註14) かくて清水にあっては個人の立場の理解を伴わぬ愛国心は忽ち対外的イントレランスに昇華する。そして一層悪いことには彼にあってはコスモポリタニズムが究極の理想であることである。コスモポリタニズ

ムは明らかにインターナショナリズムと異質のものであり、「諸国家・諸民族を一つの統一体にまとめ、全人類を同胞とみる見解」（註15）「各民族・各国家の差別を越えて統一があると考える立場。これに反して国際主義は各民族、各国家の差別を解消して世界全体としての大なる組織のうちに入れようと主張するもの」（註16）「コスモポリタニズムとは、国家とか、国民とか、国境とかいう要素を抜きにし、直接に個人を基礎として、他民族や他国家の利益や発達をも尊重し、個人を人類の一員として考え、その共同生活の地盤として世界を眺め、この地盤の上に個人の共同生活を個人の協力によって維持し発達させようとする。インターナショナリズムは国家とか、国民とか、国境とかいう要素に重きをおき、これらのものの上に他の利益と発達とを考えるのである。個人が集って国家を形成し、この国家が非常に強固な団体であるということを重要視して、諸国家の共同生活を諸国家の協力によって維持し、発達させようとする。これは人類が色々な人種や民族から成っていて、それぞれ特殊な性格、「史、文化を有するから別々に国家を形成し、特色のある固有の発達を遂げると共に、それ等の協力によって、全体としての調和のある発達を計ることが最も望ましいという考えに立つものである。（註17）「プルジョア的文献において、国際主義とコスモポリタニズムが同意語として用いられているが、階級を知らず、ただ民族と個人しか知らぬプルジョア思想家においては、問題の理解はこれ以外にはありえない。われわれにとって必要なのは、民族の問題をも、一民族内の階級対立および民族の幸福な未来を担う諸階級という根本見地を忘れず、また諸民族の平等、友好の関係がいかに各民族の大多数をしめる人民の利益にねざしているかを理解することである。ここには、国際主義はコスモポリタニズムと共通のなにものをも持っていないのである。」(註18)「インターナショナル（国際的）というのは、コスモポリティカル（世界主義的）ということではないのです。インターナショナル マン（国際的な人間）というのは日本の国籍や、日本民族の立場を忘れて、全くコスモポリタン（世界主義者）になりたということではないのです。今日、ユダヤ人はコスモポリタンです。祖国をもたない。然しインターナショナル な人間というのは祖国をもつ。祖国のためには自分を犠牲にすることのできる人間のことです。今日、日本でインターナショナルというとよくいわゆる祖国をもたない、というものに置換えられる危険があると思うのです。つまり日本民族の立場を忘れて、全くどこかの国の奴隷になりてしまう。身も魂も売り渡してしまう。そういうふうに考えられている場合が少くない。国際的というのは国民相互の関係をしっかりと認識するということである。だからして体制というような、インターナショナル な観点は民族というような国民的な見方と実は離れたものではない。コスモポリタンには、体制も民族もなく、ただ自分個人があるだけです」（註19）「かつて日本を訪れたソ連の作家ゴルバートフが実につまいことを云っていた。インターナショナルとは、自分の周囲をよくしていき、世界中の人々の握手によって、このような努力を結集し、世界をよくしてゆくことだ。これに反してコスモポリタンは、ベニスの女がよいといってはベニスに行き、ブルゴーニュの酒がよいといってはブルゴーニュに行き、といった工合に、よい所を思い求めて渡り歩くものだと

いうわけである……』（註20）とみるべきであろう。国際主義と愛国主義との関係について横田は「愛国とは結局において国の利益を計り発達を計ることである，単に自国のみの利益と発達を計り他国のそれを排撃することは反って自国のそれも実現出来ない。すべての国の利益と発達が進められ，その結果として自然に自国のそれも進められるのであろう。真の愛国はこの様に国際主義と両立するものであって寧ろ両者は実質において一致し，ただ重点をおく方面が異っているに過ぎない」。（註21）としているが，これは皮相の考えであり現実無視の空想論に過ぎず，我々はもっと異った方面からこの問題をとらえるべきではなかろうか，高島はこの点に関して「民族とか民族主義とかいう表現は，一見すると，愛国心というよりはもっと客観的で，もっと結合の強ったものを含んでいるように見える。けれども民族的感情は愛国心に比べてどれ丈不透明さが少いであろうか，民族主義とは何か，それはデモクラシーや国際主義といかにして結びつき得るか。民族主義においてファシズムとデモクラシーを分つものはなにか，民族主義の意味内容が複雑で一義的でないということからきている。民族は，現実に歴史の上に現れた姿においては，自然的なものを担い手として，形成される人間の歴史的社会的関係に他ならない。即文化的同体が社会的同体をその担い手としてはじめて現実的な共同体として民族が現われる。民族主義の主張なり運動なりは特に近代的なものであるが，民族主義が近代化への力強い要因として，積極的な意義をもつようになったのは，国内的統一の運動としてであった。民族主義の確立に最も積極的役割を果したものは，近代的ブルジョアジーであった。民族主義と国際主義との交点を見出すに当って，一番示唆するところが多いのは，近代的な国民国家の成立と発展の過程における民族と国民と階級との同一と分裂との過程である。前述の如く近代国家成立の過程では民族と国民は同じものであり，その主体はブルジョアジーであった。が一八七〇年前后から大きな変化が生じた。それは国民国家が帝国主義国家への方向を辿り始めたことである。このときから民族主義の主張や運動に一つの重大な転換が起って，ナショナリズムとインタナショナリズムの間に新しい対立が生れてきた。国際主義は国民主義（＝民族主義）を持ってはじめて成立する。そうでない国際主義はコスモポリタニズムであり，知識のない万民主義であるにすぎない。近代的な国際主義が国民国家の成立と民族意識の覚醒を基盤として発達してきたことに注意しなければならない。それを担うものはブルジョアジーである。ところが近代的資本の発展につれて資本そのものの内部で色々の分化と対立が生ずるに伴って，国際主義と民族主義の間にまず最初の分裂が始まる。ドイツやイギリスの例にみられるように国際主義は民族主義から離れてあるものではない。国際主義は民族主義の反対物ではない。国際主義は民族主義の否定ではない。国際主義は民族主義の反省された形であり具体化された形であり，より発展した形である。しかし，そうであるからこそ，国際主義と民族主義との矛盾的な分離の原因がそこに胚胎する。民族主義の担い手であるオ三階級が対建的残存勢力に対抗して闘っているかぎり，国際主義と民族主義との間に分離は存しない。けれども国家的民族主義が帝国主義的民族主義に転化し始めるや否や，右の分裂が始まる。なぜなら，国際的に自由で平等であった

諸民族の間に、支配と被支配、母国と植民地の区別が生れてくるからである。ナショナリズムはこのとき以来帝国主義の代名詞となり、インタナショナリズムはただそれを美化するための飾り言葉と化するであろう。民族主義と国際主義との交点は階級であり、ブルジョアジーはかつてこの交点をしっかりとつなぎとめていた階級であったが、今はそうでない。民族主義と国際主義との結合を可能にし、その交点を押し広くガは、今やプ三階級から"才四階級の手に移ってしまった。愛国心に於ける民族と階級の結合を考えなければならない理由は、民族問題の種族的側面が一つの力として作用していることを否定し得ない点にも存するのである」（註22）と、述べている。秋利は「敵国においても人民がこの（偽の）「愛国」に対立させねばならないかったものは、愛国一般の否定でもなく、コスモポリタニズムでもなく、外国崇拝でもなかった。なぜなら、愛国とは、日本民族の大多数の幸福と発展を願うことであり、それは、軍閥主義者と大金持のたくらむ戦争に反対することにあったからである。かれらが持出して人民におしつけ注入しようとしたあらゆる最悪のものに反対することこそ、眞の愛国だったのである。このことを忘れた侵略主義反対、国粋主義反対は、一種の無国籍主義の臭をもっていて、正しい人民的立場でなく、国際主義の正しい意味にも反する。.... 愛国の問題を現論的に理解するにあたって大切なことは革命的資階級の頭が根本において民族の敵と一致することを理解することにある。-----今日日本の人民の眞の愛国の最大の内容は、戦争への道に反対し、平和をまもる斗争によって平和で独立の祖国をかちとることにあり、このために広汎な民族統一戦線を結集し、世界の強大な平和勢力および民族の平等と独立を尊重する勢力と結ぶことにある。民族のすぐれた伝統の尊重や、祖国に対する深い民族的感情は、このもっとも大切な愛国の内容と一丸とならなければならない。」（註23）上述の多くの引例によって明らかなごとく、愛国心による排外主義とコスモポリタニズムへの逃脱の危険は愛国心そのもののムジュンではなくて、その愛国心を生みだす歴史的環境のムジュンに他ならない。それ故に、この歴史的社会的環境の変化が起らない限り、清水の言うような「名人の心がまえ」だけでは、このムジュンは解決され得ないのである。そして帝国主義にとっては民族主義と国際主義と対立する問題であって絶対に解決し得ない問題である。何故なら、帝国主義による国際的統一は、強力的領土併合や植民地占領の方法によってのみ行はれ、従ってこれに対して従属国民や植民地大衆は反抗せざるを得ないからである。植民地諸民族が帝国主義の世界支配から離脱することは、今日の段階では、資本主義の崩壊、社会主義の勝利に道を準備する。そして社会主義のもとにおいてのみ、自由意志による各民族の結合形成が保証され、愛国心に伴う二つの行きすぎのムジュンはそのときはじめて、頭の中でなく、現実的に解決されるであろう。

4

新しい愛国心が築げられねばならぬもののーつにヒューマニズムがある。元来この両者はムジュンした存在である。前述の如く、近代社会の成立と共に民族愛すなわち愛国心

が発生したが、同時にまるで矛盾の関係にあって個々の人間の解放と完成とを要求するヒューマニズムが産み出された。「近世初期にヨーロッパ人が自我の自覚に伴い、自己を形成するに際して、ヘレニズムの含む人間的なもの、現世的なものを内容とする古典『人文』の精神に則って、人間を所に形式しようといふ運動の思想を人文主義といふ。かかる人文主義に基いて近代人が古典的教養によって自己の人間性をとり戻すばかりでなく、これによって更にあらゆる権威からの人間的解放を遂行せんとする運動の思想をヒューマニズム・人間主義と呼ぶ」（註24）「そして愛国心とヒューマニズムとゆう矛盾した存在が、矛盾したままで結合するときにのみその社会の発展は迅速で、科学や芸術が栄えることが出来た。ヒューマニズムは、それが国民的解放の運動と結びつかず、それ自身の論理を追求していく場合現実に対していかなる解決をもたらさず、唯問題を頭の中だけで解決することによって、現実からの逃避を理由づける役割を果すにすぎない。…… 理念においては矛盾する愛国心とヒューマニズムは、実践において結合することが出来る。…… 今日の段階においては、実践におけるこの結合は資本主義の確立と繁栄のためではなく、むしろその超克のための手段となろうとしている。…… 愛国心に支えられないヒューマニズムがアナーキズムやコスモポリタニズムに堕落する危険のあることは問わずとするも、たとえそれが純真な人権擁護の立場を堅持し得たとしても、もしそれが解放を願う国民大衆の集団的運動と結びつかないならば、蓋白きインテリの叫びとして、簡単にふみにじられてしまうであろう。他方、ヒューマニズムに支えられない愛国心の復活は、再びかつての侵略主義に再登場の機会を与え、又しても日本国民が、愛国心の名に於て侵略戦争の手先に利用される危険なしとしない。真のヒューマニストは最も熱烈な愛国者とならなければならず、また日本国民の完全なる独立を願う者は、同時に人民の幸福と人類の平和の真剣な希求者でなければならぬ。」（註25）「我々の求める現代のヒューマニズムは昔てのやうな単なる一部の特権的教養階級の教養主義、文化主義ではなくて、民衆を対象としたヒューマニティの上に立脚しなくてはならない。しかもそれは単なる人間解放の精神ではなくて、新しき人間を作り出すことであるが、そのためには新しき社会の建設が必要であり、この建設のためには更に新しきヒューマニズムは単なる平和主義ではなくて、行動的なものとならなければならない」（註26）

5、

今日新しい愛国心のあり方がさまざまに論議されているが、それらを總括してみると、新しい愛国心は

1、天皇個人に対する忠義に由来するものではなく、民族に対する愛情に基いたものでなければならない。

2、排外主義であってはならず、国際愛と結びついたものでなければならぬ。

3、個人の価値を蔑視するものであってはならず、ヒューマニズムに裏付けられたものでなければならぬ。

4. 反ファシズム的、民主主義的でなければならぬ。（註27）
5. 反帝国主義的でなければならぬ。
6. 「慈悲の隠れ場」（註28）であつてはならぬ。

6.

私は余りにも長く語り過ぎたようだ。殊にインターナショナリズムとコスモポリタニズムの問題に関してはくどい程繰返した。この問題が愛国心の進む方向と密接な関係を持つ重要なものであると考えたからである。亦、私自身見つて大いに感わされて悩んだ経験があるので、将学の士の参考にもと思つたからである。以上を通じて、引例が多い為に甚だ理解し難い文章になりはしなかつたかという点を恐れるが、なるべく生の材料をと思つてカナ使い等も原文のままにしておいた。私自身の考があまり述べられていないのは引用文が云つてしまつたことを繰返す必要を認めないからである。我々が愛国心を考える場合に最も大切なことは、それが観念論的な非科学的な思考に陥らずに飽くまでも現実と四つに取り組んで我々の日常生活そのもの、過去の遺産な体験そのものから導き出されるものでなければ独善のそしりを免れ得ないだろうということである。そして我々が自己を信じ、人類を信ずるならば、我々の愛国心は必然的に、輝く明日の人類の為のものでなければならない。

（1952年 1月 4日）

一愛国について一 註

1.「きけわだつみのこえ」49年10月、東大協組出版部　37ページ
2.「民主戦線の提唱」社会評論　46年2月　宮坂参三
3.「新しい愛国心」　高島善哉、50年10月、弘文堂
4.「愛国心」横水義太郎　50年3月　岩波新書
5. 註3書　159 P.
6. 註4書　7 P.
7.「理想」224号　淡路三郎　52年1月　理想社　8 P.
8. 註4書　15, 17, 20, P.
9.「哲学用語辞典」出隆、古在由重編、51年5月　青木書店
10. 註9書、5 P.
11. 註7書、大河内一男　6 P
12. 註3書、160 P.
13. 註4書　94 P.
14. 註 〃　107 P.
15. 註9書　144 P.
16.「哲学小辞典」岩崎陽　208 P　48年11月、厳書房、
17.「愛国と国際主義」（「新愛国論」50年2月文理書院）鶴田喜三郎　46〜→48 P
18.「愛国の問題について」（「民科研究月報」51年10月）　滝村一人　5 P
19.「転向日本の社会意識」（「人間の自由と誇りと」51年4月）理論社　高島善哉 257→258 P
　　未　体制というのは　資本主義体制、社会主義体制などを指す
20.「科学と技術」武谷三男、理論社　51年4月　9 → 10 P.
21. 註17書、55 → 57 P.

22. 註3書 92→114 p.
※第四階級――プロレタリア階級をいう。フランス革命当時，第一階級（国王），第二階級（貴族，僧侶）、第三階級（一般民衆即ブルジョア階級）．しかなかったが、近代的左翼党であるプロレタリアートは必要以上の何れにも属さぬので第四階級と称する。
23. 註18書 1→4 p.
24. 註16書 加藤徹一．273 p.
25. 「愛国心とヒューマニズム」（「人間の自由と尊厳と」51年4月）浅倉三郎 15→21 p.
26. 註23書 274 p.
27. 註7書 14 p.
28. ドクター．ジョンソン「愛国心は悪党の最れ場」

Mozart kaj Beethoven について

松岡凡太郎

R.O. の五月号にエスペラント入門講座としてMozart kaj Beethovenが載せられて，三宅史平先生の懇切な解説と流麗な訳文がついているのを読んで，このエスペラント訳文とドイツ文とを対照してみたいと思った。

もとより私はドイツ語をdo re mi でらいしか知らないし，エスペラントの方もまだkomencanto に過ぎないのだから，メクラ蛇におずのソシリを免れがたいけれども，私にとっての一つの勉強として書いてみようと試みたに過ぎない。諸君からいろいろの御批正が得られるならば幸甚。

Mozart kaj Beethoven

Estis en la jaro 1787, kiam la juna Beethoven vojaĝis de sia naskurbo Bonn al Vieno. La 16-jara junulo volis ricevi lecionon de Mozart.

Kiam Beethoven vizitis la mondfaman muzikiston por la unua fojo, li ion ludis al li. Mozarto aŭskultis kaj laŭdis la ludon, sed nur per malvarmaj vortoj. Li pensis: Ĉi tiu juna viro ludas ion, kion li diligente lernis en sia hejmo.

（訳　文）Mozart und Beethoven

Es war im Jahre 1787, da reiste der junge Beethoven von seiner Vaterstadt Bonn, in der er wohnte, nach Wien.

Der Jüngling, der 16 Jahre alt war, wollte bei Mozart, dem großen Meister der Töne, dessen Name schon weltbe-

rühmt war, Unterricht nehmen.

Als Beethoven iht das erstemal besuchte, spielte er ihm etwas vor. Mozart hönte zu und lobte sein Spiel, aber nur mit kühlen Worten. Er dachte: „Der junge Mann spielt da etwas, was er zu Hause fleißig eingeübt hat."

(G) Es war im Jahre 1787, im = in dem
Estis en la jaro 1787,

ドイツ文では前置詞の in は必らず格をとるのに、Esp. では前置の en に格の支配が弱く、年や時、気候などの場合には英語やドイツ語のように文法上の主格 it や es を必要としないことは省略で既によろしい。

kiam ------ = da -------「------したその時。」

la juna Beethoven = der junge Beethoven

ドイツ語でも固有名詞に定冠詞をつけないが、定冠詞 + 形容詞 + 固有名詞と為ると意味が限定される。

naskurbo = die Vaterstadt

de sia naskurb Bonn al vieno = Von seiner Vaterstadt Bonn nach Wien.

in der er wohnte「そこに彼れが住んでいた」は Esp. 文では略かれている。

vojaĝis = reiste (reisen の過去形)(3人称単数の)

La 16-jara junulo = Der Jüngling, der 16 Jahre alt war

十六才の青年。 der Jüngling は 12.3才から 20才までの若者、青年のことだと岩波改和辞典には説明してある。

volis = wollte (wollen の過去、欲した、望んだ、願つた)

la mondfama muzikisto この原文は Mozart, dem großen Meister der Töne, dessen Name schon weltberühmt war と説明的になつている。

ちなみに 1949年の R.O 五月号に掲載された初等講座の Esp. 文には La 16-jara junulo volis ricevi lecionon de la mondfama Mozart.

Kiam Beethoven vizitis lin por la unua fojo, li ion ludis al li, と為つている。これは初学者のために解し易くするためにわざわざ簡略にされたのかも知れない。

leciono = das Unterricht 教授、授業

エスペラントとドイツ語の共通のものをあげてみれば、 der Meister は la majstro, der Ton (-e) は tono, der Name は nomo (英語の name) から分り知れない位 ------) などがある。

mondfama = weltberühmt 「世界に有名な」

固有名詞の人名や地名は人名地名辞書を引いて正確な発音を知る必要がある。と私は思う。例えばここに出て来るベートーフェンには二つの発音があると云うことだ。Beethoven ('be:tho:ʃen, 'be:tho:vən) (1770－1827)

Mozart ('mo:tsart) (1756－1791)

viziti = besuchen (訪問する) → besuchte 訪れた。

ricevi = nehmen 取る、捕む、受取る。

por la unua fojo = das erste mal 「はじめて」(副詞句)

li ion ludas al li = er spielte ihm etwas vor

かれ(Beethoven)はかれ(Mozart)に何かを演奏してきかせた。

ドイツ語では vorspielen 「演奏してきかせる」→ spielte vor 「演奏してきかせた」となる。この spielen には遊ぶ、商賣事をする、投機をする、演奏する(音楽)、演ずる(劇)、などの意味があつて ludi と殆んど同じ意味をもつ。

aŭskulti = zuhören 「耳を傾ける」

laŭdi = loben 「ほめる」 lobte 「ほめた」

ludo = das Spiel 「演奏」

sed = aber 「けれども」

per malvarmaj vortoj = mit kühlen Worten ドイツ語では単数になつている「冷い(冷々の)言葉をもつて」

nur = nur 「ただ」 Esp もドイツ語も同形。

pensi = danken → dachte 「考えた」(過去形)

: du punkto = ドイツ語でも Doppelpunkt または kolon と言う。

: —— 「——ということを」という意味をあらわす。但しドイツ文の方では(;) Strichpunkt をつかつている。直接話法だから ------。Esp文の方は間接話法になつているから(:)をつかつているのだ。これはドイツ文でも同様である。

ĉi tiu juna viro = der junge Mann

Li ludas ion, kion li diligente lernis en sia hejmo. = Er spielt etwas, was er eingeübt hat (関係代名詞)

diligente = fleißig

lernis = hat eingeübt 覚えこんだ(練習して)。

en sia hejmo = zu Hause 「うちで」(副詞句)

Beethoven rimarkis la malvarman laŭdon kaj fariĝis malagrabla. Li petis la grandan majstron pri-temo; li volis ĝin uzi por libera fantazio.

Kiam Beethoven koleris, li ĉiam ludis kun fajro kaj granda pasio. Tiel estis ankaŭ ĉi tiun fojon. Mozart aŭskultis kaj esti profunde emociita. Li turnis sin kaj diris al siaj amikoj, kiuj ankaŭ aŭskultis kun miro: "Atentu ĉi tiun junulon! Iam oni parolos pri li en la mondo."

◆ 1949 の R.O 5月号には

kaj farigis malagrabla が kaj estis ofendita となっており. Li turnis sin kaj diris al kelkaj amikoj となっている。この kelkaj amikoj の方が siaj amikoj よりもドイツ文に対しては忠実のようだ。

（邦文）

Beethoven bemerkte das kühle Lob und wurde verdrießlich. Er bat den Meister um ein Thema, das er für eine freie Phantasie benutzen wollte.

Wenn Beethoven gereizt war, dann spielte er immer mit Feuer und großer Leidenschaft. So war es auch diesmal. Mozart lauschte und war tief ergriffen. Er drehte sich um

Und er sagte zu einigen Freunden, die auch mit Erstaunen zuhörten: „Auf den gebt acht! Der wird einmal in der Welt von machen."

〔註〕

rimarki = bemarken 気がつく、認める。

la malvarman laŭdon = das kühle Lob 冷やかな賛辞を。

エス語の目的格には —n のように名詞に n をつける事. ドイツ語では4格をもって表る。

farigis malagrabla = wurde verdrießlich. 腹立たしくなった。腹を立てた。 unde は werden（----- に成る）の過去。

petis = bat そうだ bitten「頼う」の過去。

temo = ein Thema エスペラントの temo はドイツ語の Thema に同じ。

fantazio = eine Phantasie 幻想曲。Ph = F だからエスペラントの fantazio = Phantasie（fanta'zi:）

li volis ĝin uzi por libera fantazio = das er für freie Phantasie benutzen wollte.

Kiam = Wenn. ドイツ語の「----する時に」は Wenn と als がある。wenn の方は何回も ----する時（習慣）を, als は唯一回きり ----する時に用いられる。エスペラントの kiam にはその区別が無いから簡便だ。

koleri = gereizt (何、誰に対して) 立腹している。

ĉiam = immer 常に、毎度。

kun fajro kaj granda pasio = mit Feuer und großer Leidenschaft.

fajro = Feuer 燃える火、熱烈。

pasio = Leidenschaft 情熱。

Tiel estis ankaŭ ĉi tiun fojon = So war es auch diesmal ドイツ語では不定の es を用いる。

ĉi tiun fojon = dies mal こんど (副詞句)

aŭskulti = lauschen 傾聴した。

estis profunde emociita = war tief ergriffen.

Li turnis sin = Er drehte sich um. umdrehen「廻転させる」→ drehte um (分離動詞の過去)。

diris = sagte 言った。

al siaj amikoj; al kelkaj amikoj = zu einigen Freunden 二三の友人達に (対して)。

kiuj ankaŭ aŭskultis kun miro = die auch mit Erstaunen zuhörten

kun miro = mit Erstaunen

Atentu ĉi tiun junulon = Auch den gebt acht!「彼の男に注意したまえ」

iam = einmal「いつか、過日」

Iam oni parolos pri li en la mondo = der wird einmal in der Welt von sich reden machen.「彼の男 (かれ) は過日世界 (世の中) で、人の噂にのぼるであろう」(名声をあげるであろう)。こんな場合にエスペラントでは、oni を使って簡単に表現できるのは、大変便利だと思う。

(21 5. 1954)

Bedaŭro Sro Koiĉi (Ne, Koiti) KATŌ jam foriris el Hokkaido, kaj nun li estas loĝanto en Nagoja. Ofte mi pensis, ke li certe estos bona kaj ĉarma gvidanto al ni junuloj, sed tia deziro estis jam vana. Ni nur bedaŭras la foriron de ĉarma esperantisto……

埋　火 ……(2)

相沢治雄

わびがき

前がきやあとがきがあるのだからわびがきという言葉もあるかも知れない。昨年度17回の小樽の大会でHELの本部を札幌にうつしていただき、LEONTODの一部分をHELのために開放していただいた。全道の同志諸君もその後の経過に多大の注目をされておられた事と思うし、私自身としても、心気を新にして大いに活動する決心と、ささやかな自信を持っていたのである。然るに……あゝ、然るに、実に何一つする事もなしに往年と日左おくってしまったのである。全道の同志諸君の期待を裏切った罪多大なるものがある。

申訳になるが、(申訳にはならないが、と云った方が適切かも知れない)昨年度の大会以後は我が生涯の最悪の年と言うべき年であった。相つづいて起る病やみ、財政的一社会的一仕事の事一並に一あるいは、健康上の、行づまり、信用にかゝわる禍なやむを得ない禍な出来事、床にはつかないが病気と同じ不健康といふ禍な事柄につくしがたい悪条件が次から次からと起つてくる。だれでも一年の間のある時期には、こうした事を経験する事なのであらう。私自身も今まで色々な多くの困難を経験して来たつもりだが、しかし今度は、それ等の悪条件の外に更に明状すべからざる無気力がとも伴うのである。こんな事は全く言訳にしかすぎない。何とか早くこの状態を脱却して本来のエスペランチストの一人に立ちかへらなければならない。メ切間近になって山本君から原稿の催促を受けた。申訳ない話だが前回の続を書くには、資料の整理も不充分であるが、後日足りない処はおぎなうつもりでお許しを願います。

第一回大会の開催とその前後 (二)

さて第一回の全道エスペラント大会は前回に述べた通り大成功大

あり反響で参加者が〇〇名位になつても受入出来る体制がととのへられていた。始めての大会に参加する喜びと感激に胸をおどらせ乍ら山部の駅におり立つと、中村久雄君始め山部村の同志が出迎えて下さつたのは当然の事であるが、驚いた事に土地の子供達や、村の人達が手に手に緑葉の小旗を打ふり乍ら Bonvenon !! とたけんでいるではないか。更に Unua Kongreso の文字を染めぬいた大きな旗がひるがえり Bonvenon ! と書かれた、大きな松の小枝のアーチが作られている。宿舎は大本登竜舎といふ大きな建物であつた。村のどこを歩いても、エス語の案内や、大会のポスターが目にとまり、興奮冠を敢歩しても、子供達が Bonantagon とあいさつし、登竜舎で食事をする時は女中さんが Bonvole mangu と御飯をよそつてくれる。大会の準備の大掛りなのにも驚いたが、村の人達にこれだけエス語を普及した中村君の努力には全く敬服の外はなかつた。大本の信者がこの大会に大変な好意と協力をされた事については、私は今もつてすなほに感謝で感謝している。尹谷省秀氏（旭川の新聞記者小口多計士氏の事だと思う）は大会参加記に次の様な記事を書いておられる。

大会の前日駅頭に立てられた案内図（エス語のみにて説明入り）の大看板が雨水に立てられている。---- 早速気が付いた主催者側の某氏が注意するとエスペラントの一の字も知らない大本の奉仕者がその看板の立て方を引き受けたためだつたといふ-----

口の悪い人達は大本はエスペラントを宣伝の道具に使つたといふが、若し大本が力を入れてくれなかつたら全道大会も出来なかつたかも知れないと今でも時々思つている。

さて大会の第一日目は、午前中各地から参集した同志の懇談時あつて山部村小学校で、午前二時に（昭和七年八月五日、金）発会式が開催された。さて前回以来この第一回大会の準備工作を説明したので、恐らくそをよまれた方々は大会の参加者が数百名に上つた事と想像される事と思う。少なくとも百名位は参集した事とお考えの

事と思うが、実に参加者延数欠席参加を合めて21名であった。この内 F-ino Agnes Alexander、S-ro Jozef Major、井上熙月の三氏は大本で招聘したものゝ様であり山部の同志は全部大本信者で4名、大本関係の各地の参加者3名、大本に全く無関係の参加者札幌2名、静広2名、吾小牧1名、函館1名、室蘭から4名の参加者があつたが大本との関係は不明である。したがつて山部以外の参加者は14名であり大本に全く関係がないという同志は7.8名であつた。

行事のあらましは、Saluto 祝詞朗読等の外特別なものを挙げればヨセル、マヨルのレクタ、メトードの説明会（午后4時30分から）午后7時からの晩餐会、第2日八月六日（土）8時から山部及其附近の地展望、服部幸雄、欧洲哲学の最近の傾向 ヨセフ・マヨール、午后3時一 Oratora Kunsido（之は全部地元の同志諸君）午后4時から第1回快議会、議題北海道エスペラント連盟組織について（之についてはHELの誕生として別に記述するつもりである）午后8時 Amuziga Vespero、福引（エス文）エス語独唱"麗人の歌"、舞踊"荒城の月"、"宵待草"、その他盛沢山、この中で忘れられないのは第1回エスペラント大会の歌といふのをマヨルが作り、この夕食参加者がマヨルの指導で練習して歌つた。その曲がどんなのであつたか思い出せない。終にその歌詞を記す。曲は"Should I"といふ英国の歌によるのと聞いたが御存知の方は御知らせ願いたい。閉ぢる日目は聯盟の役員決定、次回大会開催地の決定等あり、午前10時からは山部小学校にて地元民に対する講演会あり翌八月九日は Postkongreso として芦別山へピクニーコ、その外の催しとしては地元民に対する展覧会、特別巡回講演会が持たれた。

（註） エスペラント大会の歌は頁の都合により26p.下段へ

カナニッポン語とEsperanto

サッポロ　アリマヨシハル

外国のEsperantistoと文通を始めて、しばらくたつた頃の昭和10年の元日の朝、Hungarujoのkovacs Gustarさんからletero がとどいた。コワーチ・グスタウさんは中学校の先生だつたが、彼はEsperantoを通じてすでにカタカナ、ひらがなを覚えていて、日本のlia amikinoから送られた主婦の友や婦人倶楽部などはフリガナを頼りに読み、漢字も少しは知つているらしく、わたし宛のleteroには年月日が漢字で、名前はカタカナでコワーチ・グスタウと書いてあつた。Leteroには「漢字は覚えにくいからその科学的暗記法を教えてほしい」と書いてあつた。

木偏で書き始める漢字はすべて木に関係があり、三水のついている文字はみな水に関連があるのなら漢字は科学的な文字といえるが鉄偏は鉄偏でなく、コンクリート偏もコンクリート偏ではない。両方とも木偏なのだから非科学的だ。陸地の多い満国の漢の字が三水なのもおかしい。女の良いのは「娘」と書くからケモノの良いのはŝafoかと思うと「狼」と書いてLupoのことだし、ケモノの王さまはいつも「狂」っているわけだ。わたしたち日本人は漢字を科学的方法で覚えるのでなく丸暗記しているのだから通信教授では大変であるという意味の返事に添えて、カナニッポン語で書いた手紙をカナモジタイプライターでたたいて送つたのだつた。それ以来、グスタウさんは大のカナモジ礼讃者になつて、日本語は漢字であらわすよりもカナモジで書いた方がその組立においてEsperantoと類似した点がはつきり判つておもしろいということに考えが及んだようだつた。

カナニッポン語というのはカナモジだけで書いてよく判るコトバでしろカナモジで書いた方が味の出るコトバのことである。例えば、blindulo のことを日本語では「メクラ」と云い、漢字日本語では

盲人と書き、それを「モージン」を読んでいる。盲人は文字面から判るように目を亡った人、目のなくなった人であり、「メクラ」はコトバの意味から目が暗くなった人のことで、モージンよりはメクラと呼ぶカナニッポン語の方が味があり、合理的である。

いまRO語上で、kriptomerio が cedro かと同語になっている「スギ」の木も杉という漢字を見るだけではナゼ「杉」という形にするのかピンと来ない。だがカナニッポン語で「スギノキ」と書いてみると、それがマツスグノキ → スグノキ → スギノキとなって木の形と名との関係がはっきりする。Pensi を「考」と書くよりは「カンガエル」とカナニッポン語で書く方がカンガエル → カムカエル → カミムカエル ≒ 神迎えるとさかのぼってその成り立ちをさぐってみると、日本語の pensi は「心に神を迎えて、新しい ideo を注入してもらう」と、その順序がはっきり説明されていることがよく判り、ものごとを考えることがこのような順序で導入されるものであることは心霊科学から云っても正しいことは証明されている。

日本語の同音意義 ponto（橋）, mangbastonetoj（箸）, rando（帯）, peko（嘴）, ŝtuparo（階）, ŝtupetaro（梯）, kolono（柱）と色々な意味を表わすと同時に読みが同じであるので各語にはハシの意味を持つ同じ部分が含まれているわけである。それはちょうど pulvoro, infano, silkraupo, holoturio の各語の日本語 ゴな、ゴども、かいゴ、なまゴに見るようにみな malgranda の意味を持つ「ゴ」が含まれているようなもの。この橋、箸、帯、嘴、階、梯、柱にみなハシという音と意味が含まれていることはこの7つのコトバに「ある点から別の点をつなぐ物」「そのつながれる場所」「つなぐ役目をするもの」の意味があるからである。Ponto（わたりバシ）, ŝtuparo（きざハシ）, ŝtupetaro（ハシゴ）, kolono（ハシら）はそれぞれ rivero の両岸を、高下と階上を tero と altaĵo を、tero と ĉielo または tero と tegmento をつなぐものであり、mangbastonetoj（おハシ）, peko（くちバシ）は食

物の入れものと口の間をつなぐ役をするもののことで、rando（ハシっこ）はつながれるその地点のことである。このハシと発音する日本語も漢字で書いたのではお互のもつ意味のつながりは判らないが、カナで書いてはじめて、なぜお互にハシという音の同じ部分が含まれているかが判るはず。このように日本語はカナモジで書くカナニッポン語の方が漢字でかく漢字日本語よりは味があるし、コトバの成立ちや変化がはっきりする。またカナモジで書いた日本語の語尾変化は Esperanto のように規則立っているものが多いようにおもわれる。

Esperanto では不定動詞の語尾に「aĵ」を付けると、その動詞の表わす意味をもつ名詞に変ることは皆さんとっくにご存じのところだがカナニッポン語でも「aĵ」と同じ役目をもつ接尾辞「モノ」を不定動詞の語尾に付けると名詞になる。たとえば、

vesti, キルは vestaĵo, キモノ
manĝi, タベルは manĝaĵo, タベモノ
trinki, ノムは trinkaĵo, ノミモノ
vegeti, ウエルは vegetaĵo, ウエモノ
legi, ヨムは legaĵo, ヨミモノ

となって Esperanto式に形も読みもうまく行く。ところがこれを Ĉina litero で書くと、着物、食物、飲物、植物、読物となり、形の上では規則正しく見えるが、その読み方はキモノ、ショクモツ、ノミモノ、ショクブツ、ヨミモノ、となって、語尾が「モノ」と「モツ」と「ブツ」の2とおりに読みを統一したいと思っても manĝaĵo を「ショクブツ」と発音するわけにはいかない。vegetaĵo と区別出来なくなるから。

Esperanto で台所のことを kuirejo というがこれがカナニッポン語の kurija と発音が似ているのはおもしろい。kurija の ja は kuir-ejo の ejo と同じく「そのもののある場所」や「そのことをする家」を示している。

学校の lernejo は　　マナビヤ

理髪店の　barbirejo は　トコヤ
青果店の　legomvendejo は　アオモノヤ，ヤオヤ
菓子司の　kukejo　は　オカシヤ
書　房の　librejo　は　ホンヤ
呉服店の　ŝtofejo は　ゴフクヤ

となつて漢字語で、校．店．司．房といろいろに書かれる語尾が Esperanto では「ejo」カナニッポン語では「ヤ」1種であらわされるのもまた Esperanto 式に規則変化が出来ておもしろい。もし漢字が巾をきかさず日本語が発音を主にしたカナニッポン語として発達して来たなら、炊事場、学校なども「クリヤ」「マナビヤ」のまゝ今でも通用しただろうし、日用語としては使われないで看板、広告だけに使われる見るだけのコトバ菓子司、青果店、書房という漢字語は出来なかっただろう。そのうちにトコヤ、ホンヤ、ゴフクヤなども次第に理髪店、書店、呉服店にとつてかわられるにちがいない。漢字はこうして日本語の発音の上の美しさを乱して行くので困った文字だとおもう。vendejo の「店」をカナニッポン語では「ミセ」または「ミセヤ」と言い、コドモたちはそのママゴトコトバで「ウリヤ」と言つている。「ミセ」は「ミセヤ」の略されたものだろうが「ミセヤ」は売り物を多くの人に広くミセる場所や家のこと。ママゴトコトバの「ウリヤ」は vendejo をそつくりそのまゝカナニッポン語訳にした形になり、これまたおもしろいとおもう。

漢字でかく男と女、息子と娘、彦と姫、婿と嫁、鯛と鱒は Esperanto では viro と virino，filo と filino，belulo と bel-ulino，bofilo と bofilino，maljunulo と maljunulino となる。男、息子、彦、婿、鯛には形の上では相互に男性を示す目印はないが、女、嬢、姫、嫁、鱒にはすべてに女が付いていて形の上ではつきり女性を表わすコトバであることが判る。Esperanto の viro，filo，belulo，bofilo，maljunulo も形の上では男性を表わすことははつきりと示されてはいないが文法上男性名詞になり、接尾辞の in が付いておればすべて女性名詞になる。これをカナニ

ッポン語で表わすならば、オトコとオトメ、ムスコとムスメ、ヒコとヒメ、ムコとヨメ、オキナとオミナとなって、男性名詞はコトバの一部に「コ」「キ」を含み、女性名詞はそのコ、キを「メ」「ミ」と書きかえるとわけなく出来るわけだが、ムコとヨメはお互の語尾を入れかえても出来ない。カナニッポン語ではムコは「ムカエタムス」であり、ヨメは「ヨンダムスメ」であることを示す。カナニッポン語では男性味の含まれているカキクケコの一字があれば男性名詞になり、女性味を持つマミムメモの中の一字が含まれておれば女性名詞になるというように音と形の上ではっきり区別出来るのは世界でもすぐれたコトバだとおもう。しかしこの方則が次第にくずれて来るのは惜しいことだ。

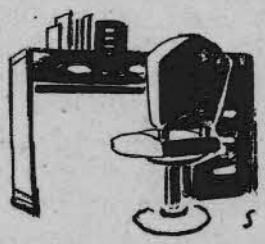
Esperanto にはアニとオトウトを一緒にした frato，アネとイモウトを一緒にした fratino というコトバしかないので日本人には不便だと思われる。かと思うとカナニッポン語にはイトコ一種類しかないのに Esperanto には Kuzo, kuzino, gekuzoj と分れている。また漢字日本語ではもっと詳しく従兄、従弟、従兄弟、従姉、従妹、従姉妹、従兄弟姉妹と7区分されて便利なようだが、読んだり話すときは、せっかく詳しく書き分けられているこのコトバも「イトコ」ただ一声に縮ってしまうのだから、便利なようで不便なわけだ。オトコ、オトメ、ムスコ、ムスメの語尾変化にならって、従来のイトコをKuzoの意味に使い、イトメを kuzino と同じ意味の新語とするならばすばらしいコトバに成るのだが。これをもっと飛躍させて従兄と従姉をアイトコとアイトメとし、従弟と従妹をオトイトコとオトイトメとしてはどうだろう。gekuzoj 従兄弟姉妹はカナニッポン語ではイトコとイトメを合せたイトコメとしたらどうだろう。

また「クシヤミする」とか「よくクシヤミする人」だとか「クシヤミしなさい」とか長たらしく言わないで、Stolo, Steli, Stelu, Sutelisto, Stelanta をそれぞれヌスミ、ヌスム、ヌスメ、ヌスビト、ヌスンテルと言うのにならって、クシヤミ、クシヤム、ク

シヤメ　クシヤビト，クシヤンテルというように新しいコトバを作り、これをそれぞれ terno terni, ternu, termisto, ternanta の意味に使うことにしたいものだと一人で楽しんで見たり、「悲」に対するカナニツポン語「カナシミ」を次のように変化させて

名　詞	malĝoj-o	カナシ・ミ
形容詞	malĝoj-a	カナシ・イ
副　詞	malĝoj-e	カナシ・ク
不定動詞	malĝoj-i	カナシ・ム
現在動詞	malĝoj-as	カナシ・ミマス
過去動詞	malĝoj-is	カナシ・ミマシタ。
未来動詞	malĝoj-os	カナシ・ミマシヨウ
仮定動詞	malĝoj-us	カナシ・ムカモシレナイ
命令動詞	malĝoj-u	カナシ・メ

日本語がみな Esperanto 式に規則正しく変化するかのような錯覚にとらわれそうになることがある。しかし日本語をカナモジで書いてカナニツポン語として Esperanto の変化に合せて見ると、まだ気付かない点にぶつかるかも知れないので、これからもカナニツポン語と Esperanto 語の類似点を探究してみたいと思つている。



Pri la Estonteco de Japana Filozofio : Ĝia Novkreota Formo

— La Dialogo inter Du Foririntaj Filozofoj de Japanujo : S-ro Kiyosi Miki (三木清氏) kaj S-ro D-ro Kitarō Nisida (西田幾太郎博士) —

Trad. de Noboru Hajakawa

S-ro Miki — Mi eĉ pensas, ke ankoraŭ ne estus la teorieca filozofio en Japanujo. Tamen se ni havas ĝin, kiel ĝi formiĝis?

D-ro Nisida — Ni trapuŝigu la europan filozofion. Car nia filozofio deras hari la teoniecon. En Ĉinujo funkciadis la konfucianismo kaj la Sortodirenarto, tamen ni verŝajne ne povus ilin traini. Same ni ne povus la Budaismon traini, spite de ĝia boneco iom enhavanta. Estas necese por nia filozofio, ke la karakteriza pensmaniero, trapuŝiginte la eŭropan filozofion kaj elviriĝis, alkaptu nian enkorajon. Do, eŭropmaniere ni studadu. Kaj, ni denove trapuŝigu la eŭropan filozofion. Tiel ni faru komplete. Ni ne ekstudu facilenime la filozofion de S-ro Husseal aŭ S-ro Heidegger, kvankam ili ŝajnas al ni furoraj. Ni por unua paŝo trastudadu la grekan filozofion ĝisfunde.

S-ro Miki — Nuntempe estas la studantoj de la eŭropa filozofio, kiuj duonvoje sin turnas al la furoraj problemoj pri la japana spirito.

D-ro Nisida — Mi pensas, ke la inklino malbone gridos

nian Staton. Ĝi signifas la returneiron sendube. De kio alrenos la estonta filozofio de Japanujo? Ĝi estas esence la problemo de la fakto. Ankaŭ la filozofio bezonas sin ligitan kun la nuna teorio. Tamen, la japana kulturo ĝis nun ne havus la evoluecon. Kiel ekzemple, estis la utaja Nuntempe, kiam estas ĉie kafejoj, kiel ni porus evoluigi ĝin? Certe ni ne poras renki novan utajon. Same kiel la teceremonio, kvankam iuj trinkas teon sur sogo kiel teceremonio. Mi pensas, ke la ĉiuj kulturaĵoj de pasinte Japanujo komplete evoluciis en la formo. Nun estas la epoko, kiam ni krou ian noran formon por ĉiu da niaj kulturaĵoj. Kvankam ni poras pli rafinite fari ĉitiun tablon, ni preskaŭ ne povas krei la noran formon por nia teceremonio. Mi kuraĝu konsili al la japanaj gejunuloj, ke por si mem elkaptu pligrandan problemon.

— S-ro Kiyosi Miki: "Mia Interparolado kun S-ro Prof. Nisida"
(三木清著「西田先生との対話」p. 20 ～ 22.)

エスペラント通信教育

開講中

○ 希望によりいつでも受講できます。

○ 通信による質問と添削指導を行います。

○ エスペラント学習に要する費用は次の通り

教科書・通信費 500円
エス和詳説 180円

小樽市汐見台町一 小樽商業学校内

エスペラント研究会

Pri Korespondado

— Traduko de Takeotori — Monogatari

Tatuji Takahasi

Korespondado kun alilandaj gesamideanoj estas tre interesa. Per tio ni poras persone scii kiel estas alilandulaj viradoj kaj kian penson ili haras t.t.p.

Inter japanaj homoj estas multaj homoj kiuj bone scias pri alilanduloj perede angla lingvo. franca lingva aŭ aliaj naturaj lingvoj. Sed ĉu ili poras interkorespondi kun fremlanduloj kiuj parolas aliajn lingvojn?

Esperanto estas nura lingvo per kio oni interkoni fremlandulojn en tutmondo. kaj pro tio ni poras diri ke la lingvo estas la plej konvena.

Sed se ni ne uzas la konvenan lingvon nia lernado de Esperanto estas tute rana. Do, mi demandas al vi kiel vi uzas la lingvon. Ĝeneralaj japanoj ne facile poras iri al fremlandoj, do multaj enni ne parolas frunte la frunte kun fremlanduloj. kaj nur uzas ĝin por interkorespondi.

Jes, korespondado estas facila kajbona por uzi nian lingvon kaj inter ni. estas nur malmultaj kiuj ne interkorespondas por ĝi.

Kiel vi korespondas? kelkaj miaj amikoj interŝanĝas i.p.k.-n. en iliaj korespondadoj. Kaj aliaj inter korespondas por profesia studado. Ambaŭ bonaj.

Mia edzino korespondas kun ĉeĥa virino jam de-longe kajdo, mi demandis al ŝi, ĉu ŝi haras specialan celon en ŝia korespondado, kaj ŝi respondis ke ŝi haras nenian specialan celon. kaj ke ŝi korespondas nur pro intereso. Kaj intimeco al la virino. Mi pensas ke tio estas ankaŭ bona. Ŝajne virinoj inter-konsolas kaj facile amuziĝas en iliaj korespondadoj unu la alian Sed tio estas pli bona ol krocado apudpuita. ĉar tio estas malpli kulpa kaj senĝena por mi mem, eĉ se mia edzino malbone parolus al ŝi, pro ke ili loĝas en malproksimaj

landoj.

Lastatempe korespondantino de mia edzino sendis al ŝi fabellibron ĉeĥan kiu estas tre bele ilustruita kaj lerte tradukita en Esperanto.

Fabelo enhavas fantazion de infanoj kaj popolo de la lando kaj multe interesas eĉ maturan homon kaj ilustruita fabelo pli multe interesas. Do, mia edzino responde sendis al ŝi japanan fabellibron tradukitan de sia mano.

Mi ankaŭ volas sendi al mia korespondanto japanan fabellibron kaj hodiaŭ mi tradukis kiel ĉi sube nakonton de Taketori el ilustruitaj libraroj kiuj estas eldonitaj ĉ Kodan-ŝa. La sure metataj nombroj montras bildajn nombrojn sur japane verkitaj libroj. Se vi volas sendi la libron al viaj korespondantoj bonvole eltranĉe uzu tiun ĉi presaĵon post via lerta korekto.

第1回北海道エスペラント大会の祝歌としてハングリートヨセフ・マヨール作詞、余興の時全員で合唱した。"Should I"の曲御存知の方は相応しくて御知せ下さい。

KONGRESA KANTO

Orginale verkita de Józef Major
Kanto laŭ angla melodio "Should I ---"

En ĉarma val'
Bela kiel kristal'
Kunvenis ni por festo ------

En gaja rond'
El la vastega mond'
Kunvenis ni por festo -------

Alvenis jam la atendita hor'
Kaj amo brulas en ĉies kor'

En ĉarma rond'
El la vastega mond'
Kunvenis ni por festo !

KAGUYA HIME

(La belulino Kaguja)

(Laŭ la plej antikva rakonto en Japanujo. Taketori-Monogatari)

Desegnita kaj pentrita de Kanzoo Oda. Moderne japane skribita por infanoj de Jaso Saijoo.

("Taketori" signifas la homon kiu kolektas banbuon. "Take" signifas banbuon)

(1)

Jam antaŭ multaj jaroj estis maljunaj geedzoj.

La edzo ĉiutage iras al la monton por hakante koleksi banbuon. Kaj faras korbon kaj korbegon el banbuo por rendante gajni sian koston de vivado. Do oni nomas lin kiel "Taketori"

Kiel kutime, hodiaŭ li estas irenta al monton por koleksi banbuon.

(2)

Kiam la maljunulo serĉas banbuojn bonajn por haki, li troviis unu banbuon kiu brilas je ĝia trunko.

Intesiĝante al ĝi, li hakis ĝin, kaj li troris beletan kaj malgrandan infanon kiu sidas en la trunko.

(3)

"Ho, estas beleta infano!" diris li tre ĝoje. "Eble Dio donas al mi la infanon, ĉar tiel longtempe mi plendis pro ke mi ne havas infanon."

Li brakis la infanon kaj revenis hejmen kun ĝi.

Lia edzino ankaŭ tre ĝojis kaj ili decidis guberni la infanon en malgranda korbo banbua.

(4)

Post la tago, kiam ajn li iras en la banbuaron, li trovis brilantajn banbuojn je trunko. Kaj en la banbuoj ĉiam troviĝas multe da mono.

Tial li fariĝis pli kaj pli riĉa.

(5)

La infano rapide kreskis en tri monatoj ĝis kiam fariĝis mirinde belega virino.

Ŝia beleco ŝajne lumis eĉ ĉiujn angulojn de la domo de Taketori.

(6)

Taketori petis al eminentaj kleruloj por la nomo de sia filino. Kaj ili nomis ŝin kiel "Kaguja-hime".

La nomo signifas 'belegan junulinon kiu brilas kiel luno.'

Kamparanoj amase kolektigas ĉiutage al la domo de Taketori por vidi tiel belegan filinon, Kaguja-hime.

(7)

Post ne longe, kvin junuloj, kiuj loĝas en la ĉefurbo, petis al Kaguja-Hime ke ŝi edziniĝu kun si:

Ili estas Kuramoĉino-Mike, Ootomono-Mijuki, Isonokamimaro kaj aliaj du homoj kaj ili ĉiuj estas nobeloj.

Kiam la maljunulo Taketori parolis al ŝi pri iliaj petoj, ŝi respondis ke ŝi ne deziras edziniĝi

(8)

Sed tamen la nobeloj ne forlasis dezion edziĝi kun ŝi, kaj fine Taketori, konsilante kun Kaguja-Hime, postulis tre malfacilan postulon.

"Mi petas al s-ro Kurumamoĉi ke vi alportu al mi branĉon de trezora arbo en Horai-monto kiu kuŝas en orienta maro, kaj al s-ro Oomoto ke vi alportu al mi krinkolaran jubelo-n kiu estas ĉe la kolo de dragono, kaj al s-ro Isonokami ke vi alportu al mi ciprean de hirundo. Mi proponas al vi ĉiuj ke mi permesos edziĝi kun mia filino al la homo kiu la plej frue plenumos mian peton," li diris

Kompreneble tiamaniere al la aliaj du nobeloj postulis tiel malfacilan postulon.

(9)

"Nu, mi iros al Horai-monton por serĉi la branĉon de trezora arbo." Kurumamoĉino-miko diris kaj enŝipiĝis. Sed post tri tagoj, sekrete revenis en la urbon kaj kolektis multe da lerta artisto por ke ili faru pseŭdan branĉon de trezora arbo.

Post tri jaroj kompletigis tre bela branĉo de trezora arbo,.

(10)

Kurumamoĉino-Miko alportigis la branĉon, kiun jam li kompletigis, sur la ŝultroj de liaj subuloj al la domo de Kaguja-Hime.

Ŝi surprizis je alporto de la branĉo, ĉar ŝi ne povis kredi ke ĝi estas alportata, kaj demandis lin. Kiel vi ŝajnis la branĉon?"

(11)

Kurumamoĉino-Miko ĝojis ke li sukcesis mensogi, kaj pli multe mensogante parolis al ŝi kiel li trovis Horai-monton spite de multaj haroj.

Tiam bruiĝis ekster domo kaj multe da artistoj venis al la vestibro, kaŭde dirante "Donu al ni nonon pro ke ni faris trezoran branĉon."

Tial jam mensogo ne povis esti.

(12)

Ootomono-Mijuki irigis lian subulojn serĉi ĵubelon de dragana kolo, donante multe da mono, sed la subuloj neniam revenas kun multe da mono.

Do li devis nem iri por serĉi ĝin kun aliaj subuloj.

Nun li iras en ŝipiĝi fiere dirante, "Ne timu dragon. Se mi trovos ĝin mi tuj mortigos per nia pafarko.

(13)

Post nelonge de lia ekiro, venis terura ŝtormo. La ŝipo, en kiu Ootomono-Mijuki enŝipiĝas,

Jam rulegiĝis kaj trangegis kaj estis renversiĝonta.

Mijuki pensis ke tio okazigis de kolerego de dragono, kaj kriis plorante kun pala vizaĝo, "Ho, pardonu min, dragono, mi jam ne volas vin mortigi.

(14)

Dum tri tagoj kaj noktoj la ŝipo estis rompe skuita de ventego kaj ondego, kaj je la kvara mateno, ili almenaŭ revenis sur marbordon.

Ootomono Mijuki kiu laciĝis kiel malsanulo, tute konfuzite revenis hejmen,

Kaj jam li forĵetis deziron edziĝi kun Kaguja-Hime.

(15)

Isonokami-Maro ordonis al siaj multaj subuloj serĉi cipreon de hirundo. Sed ĝi nenie estas.

Iam iu maljunulo sciigis al li ke ĝi estas naska same kiam hirundo naskas ĝiajn ovojn.

Do li ordonis konstrui altan stangon ĉe granda palaco sur kie estas nesto de hirundo.

(16)

Li tenis grandan korbon je la stango per snurego.

Iun tagon hirundo ŝajnis veni por naski ovon, do Isonokamimaro zidiĝis en la korbo kaj ordonis ke la subuloj tiru la ŝnuregon kaj proksimiĝis al la nesto.

Kaj kiam li rapide enigis lian manon en la neston, li tuŝis iun je sia mano, kaj ĝojege kriis de supre "Jen, estas cipreo de hirundo, igu min malsupren!"

(17)

Tiam liaj subuloj streĉis rapide la ŝnuregon, sed ili tiom forte streĉis, kiom la ŝnurego tranĉiĝis. Isonokami Maro falis sur teron kun la korbego kaj sveniĝis.

Kiam li rekonsciiĝis li troris ekskrementon de hirundo en sia forte premita mano.

Tiamaniere, aliaj du sinjoroj ankaŭ ne povis trovi la aĵojn ktujn Kaguja-Hime petis alporti.

(18)

Fame de belega Kaguja-Hime atingis al la oreloj de imperiestro. Kaj iun tagon la imperiestro vizitis la domon de Kaguja-Hime sur lia reverenzojo de ĉasado.

Li miris je la beleco de Kaguja-Hime kaj diris ke li deziras akompani ŝin al lia palaco. Sed ŝi refuzis tion pro ke ŝi ne deziras adiaŭi al la maljunaj geedzoj.

(19)

Venas la kvara printempo de post kiam Kaguja-Hime estis prenita de Taketori. Kaj kia strange. Kaguja-Hime ŝajnas tre malgaja kiam ŝi ridas luman lunon en tiuj ĉi monatoj.

Kaj ŝia malĝojo ŝajnas des pli famiĝis granda, iu pli proksimiĝas plenluna nokto de aŭtono.

(20)

Kaguja-Hime nun estas tute malordinara, do la maljunuloj maltrankviliĝis kaj demandis la kialon. Ŝi respondis plorante "Mi estis anĝelo kiu naskiĝis en la urbego en luno. Pro iu kaŭzo, mi venis sur teron kie homoj loĝas. sed en la plenluna nokto la Dio sendos komisiiton de luno por revenigi min. kaj mi nepre devas reveni al la lunon. Pro tio mi ploras------ "

(21)

La maljunulo surprizis je sia diro, kaj sciigis tion al la imperiestro kaj petis "Mi petegas al i, via moŝto, ke mia filino ne foriru al la luno. ĉar mi gvernis ŝin tute kare dum la jaroj.

La imperiestro ankaŭ tre surprizis kaj ordonis al liaj armeoj defendi la domon de Taketori kontraŭ la lunaj komisiitoj.

(22)

Venis la plenluna nokto.

La imperiestro sendis multajn militistojn al la domo de Taketori, kiuj defendis ĉirkaŭ la domo kaj ankaŭ sur la teĝmento.

Kaj ili rigardis la ĉielon per serioza okuloj kaj pafarko kaj sago preparis. Tiam la maljunulo kaŝis lian filinon en lia plej profunda ĉambro kiun li multe ŝlosiate fermis.

(23)

Estis la noktomezo.

Subite lumeĝiĝis ĉirkaŭ la domo la luno lumas pli ol dekobla ordinara plenluno.

Kaj de sur la ĉielo multaj bele vestitaj komisiitoj kiuj rajdas sur nubo, proksimiĝis al la tero.

(24)

"Nu, pafu!" la militistoj kriis kaj estis pafonta, sed tiam tremiĝis ilin aj korpoj, manoj kaj kruroj; kaj ili jam ne povis eĉ krii.

La ĉambro kiun ili multe ŝlosisjen facile malŝlosite malfermiĝis.

(25)

La anĝeraj komisiitoj kiuj portis vetulilon flugeblan en la ĉielo, diris al la maljunulo, "Kaguja-Hime jam devas reveni al la luno kaj mi kore dankas pro ke vi zorge guvernis ŝin." kaj al Kaguja Hime, "Nu ni reiru al la luno. rapidiĝu najdi la vetulilon."

(26)

La komisiito vestis flugveston sur Kaguja-Hime, kaj la maljunaj geedzoj alteniĝis al Kaguja-Hime plordinante, "Ho mia karuletino, ni ankaŭ deziras iri al la ĉielo kun vi, se vi devas iri tien".

Kaguja-Hime konsilis ilin kaj ankaŭ plorante diris. "Mi ankaŭ malĝojas adiaŭi al vi ambaŭ, sed bonvole pardonu min. rememoru min per miaj restaĵoj post mia foriro.

(27)

Kaguja Hime skribis adiaŭan leteron al la imperiestro kiu zorge patronis ŝin. Kaj post kiam ŝi donis ĝin al la maljunulo, ŝi malgaje najdis en la vetulilon.

(28)

La bela vetutilo, ĉirkaŭita de multaj anĝelaj komisiitoj, en kiu sidas Kaguja-Hime altiĝis pli kaj pli. La maljunuloj alvokis ŝian nomon kaj rigardis post la nubon en kiu estos la veturiloj starante sur iriaj pedpintoj. Sed la nubo Baldaŭ malaperiĝis en la bele bluan ĉielon.

サッポロエスペラント会

1954. 8. 10 現在

相沢治雄	(43)	札幌市上白石町2区 定山渓鉄道運輸車掌助役	(正)
~~新井春文郎~~	~~(26)~~	~~札幌市西穂町42 日下部金吉方 札幌労働基準監督署 労働基準監督官~~	
アリマヨシハル	(47)	札幌市北24西9 開発局営繕部. 監督官室	(賛助)
石塚守	(21)	札幌市北2西14 開発局営繕部建築課	(正)
大木祝巳	(46)	札幌市外豊平町定山渓1区48 調達局庶 札幌調達局事業部術員第2課長	
島田藤三郎	(46)	札幌市伏見町1512 北海道労働基準局 労働基準局監督官	(賛助)
川村末男	(26)	札幌市外豊平町ミスマイ3区 馬鳴方	(学生)
木村喜壬治	(44)	札幌市~~伏見町337 (南16西17)~~ ~~札幌中央税務署庶務課副課長~~	
桐生育保	(40)	札幌市藻岩下376 開発局営繕部建築積算係長	(正)
~~吳屋広夫~~	~~(27)~~	~~札幌市北12東2. 西村方~~ 北海道庁地方課	(正)
坂下清一	(45)	札幌市北1東9 北工電気株式会社々長	(正)
菅井慶一	(28)	札幌市南26西10 自衛方 自衛方札幌建設部建築課	(学生)
渡辺勇久	(35)	札幌市南3西21. 北海道学芸大学助教授	(正)
渡川貞弘	(35)	札幌市南21西14 北海道学芸大学教官	(正)
高木貞夫	(22)	札幌市南13西13. 吉村方 北大農学部農業生物学科学生	(学生)
高木敏子	(21)	札幌市南1西14 家庭	

高橋喜一 (41) 札幌市大通東8—1
北海道ヒラノ商札株式会社経理課

高屋宣子 (23) 札幌市北20西3
Yoshiko
札幌鉄道局建築部

西 忠雄 (42) 札幌市北12西2
北大工学部建築工学部教授

仁張武親 (20) 札幌市南14西8 (学生)
北大一般教養部学生

~~早坂 基 (28) 札幌市南之西25~~
~~札幌鉄道局建築部~~

森谷秀雄 (39) 札幌市南7西15 (学生)
開発局官房会計課

山路尚峰 (42) 札幌市北17東4
札幌鉄道病院給食部

和綱芳之助 (38) 札幌市南9西8
国鉄琴似駅助役

渡辺由美 (22) 札幌市南4西5札幌別院内
札幌保学園被服研究部学生

渡 一郎 (27) 美唄市南美唄町三井下4区4丁目右1号
三井鉱山美唄鉱業所経理課

岡本義雄 (48) 空知郡三笠町立幾春別小学校
幾春別小学校長

(註) (正) とあるは学会正会員
(賛助) 〃 は学会賛助会員
(学生) 〃 は学会学生会員
(教養) 〃 は学会教養会員

—・第18回北海道エスペラント大会近づく・—

Karaj ĝesamideanoj !

Nia ĝojplena Jar-Kunveno tre proksimiĝis al ni. La tago kaj enhavo de la kongreso estas jam decidita. La ditalo estas jene ------

日　時　9月23日（秋分の日）
　　午前10時 — 午后3時　時間励行

会　場　札幌市　町村会館（北4条西6丁目）

会　費　参加者（kotizo al partoprenanto）
　　250 jenojn

　　欠席参加者（kotizo al neaperita kamarado — tamen jesanto de ĉi tiu kongreso）
　　100 jenojn

（会費250円の内訳—見込）

teo k kukoj	50 jenoj	
tagmanĝaĵo	100 〃	
foto	30 〃	
eja kosto	20 〃	
reporto	40 〃	
sendaĵo de reporto	10	
(sumo)	250 jenoj	

大会の収支は例年支出超過となることが多い様であり、たいがいは篤志などによって破綻をまぬがれているものの様に見うけられます。よろしく御協力下さい。

申込み先　札幌市北24,西9.
S-ro アリマヨシハル　へ

LEONTODO　N-ro 10

発　行　1954年9月5日

編集・印刷　北海道川崎市住ノ江町9の8
　　山本昭二郎

発行人　小樽エスペラント協会
　　北海道小樽市広岡町東3の11　山賀眼科医院内

会　費　40 jenoj（他に送料10円）